

旅 す る 知

船
曳
建
夫

Funabiki Takeo



海竜社

世紀をまたいで、世界を訪ねる

旅する知

船曳建夫

Funabiki Takeo



●著者紹介●

船曳建夫（ふなびき たけお）

1948年、東京生まれ。

東京大学名誉教授・文化人類学者。

フィールドワークをメラネシア（バヌアツ、パプアニューギニア）、ポリネシア（ハワイ、タヒチ）、日本（山形県）、東アジア（中国、韓国）で行う。その他にも世界各所を探訪している。

専門の関心は、人間の自然性と文化性、儀礼と演劇の表現と仕組み、「日本」とはなにか。

「アーツカウンシル東京」で東京の芸術文化創造に参画。

編著書に、『国民文化が生れる時』（リプロポート）、『知の技法』（東京大学出版会）、『柳田国男』（筑摩書房）、『「日本人論」再考』（講談社学術文庫）、『右であれ左であれ、わが祖国日本』（PHP研究所）、『LIVING FIELD』（東京大学総合研究博物館）などがある。ウェブサイト「Time Out Tokyo」にコラム「Transcreating Tokyo」を連載中。

旅する知

世紀をまたいで、世界を訪ねる

二〇一四年八月十八日 第一刷発行

著者 船曳建夫
ふなびき たけお

発行者 下村のぶ子

発行所 株式会社 海竜社

東京都中央区明石町十一の十五 〒一〇四—〇〇四四

電話 (〇三)三五四二—九六七—(代表)

FAX (〇三)三五四一—五四八四

郵便振替口座 〇〇—一〇—九—四四八八六

ホームページ <http://www.kairyusha.co.jp>

本文組版 株式会社キャップス

印刷・製本所 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えします。

©2014, Takeo Funabiki, Printed in Japan

旅する知 目次

はじめに 旅すること

私にとつての旅 2 / 「何でも見てやろう」で世界をかけまわった旅行者たち 3 /
フーテンの寅さんが旅に出る理由 5 / 世界と私の変化を考える旅 7 / 二分法に
陥らない目で世界を見直す 9

船曳建夫のこの本に関わる旅と略歴 12

第1章

サンクトペテルブルグ ロシアは悩んでいる

プロローグ 深夜のサンクトペテルブルグの無音の締め付け 24

40年ぶりのロシア

秩序を失い、混乱するロシア 26

まだソ連だったロシア

一向に気持ちがお沸かない奇妙な旅 30 / 米ドルを落とさせるための観光 32 / 体制

第2章

の隙間から噴き出てくる欲望 35／ロシアの若者を怒らせた「うざい質問」 37／ジーンズは秩序の底にある別の「意思」を教えてくれた 39／モスクワよりはるかに明るかったレニングラード 41

サンクトペテルブルグ再訪

劇場の中の傍若無人 45／無法で整然とした秩序 49／背広を着てゴミを食べる男が生んだ裂け目 53

ロシアは悩んでいる

この100年、ロシアは何の進歩もなかった？ 56／ロシアの歴史に必ず登場するインテリとは何なのか？ 58／ロシアはただ悩むことしかできない 61／「人間であることの困難さ」を実験し続けるロシア 63

ニューヨーク アメリカは不安だ

プロローグ 私の最初のアメリカ、「ぼーくーごー」 68

旅行する前のアメリカ

宙ぶらりんな日本がもたらす感覚 70／アメリカはどんどん上書きされる 73／東

と西、共和党と民主党でまったく違うアメリカ 75

最初のアメリカ本土

ボストンの友人を訪ねて 78 / そこにいるすべての人が白人のショッピングモール 80 / ランチで感じたアメリカらしさ 84 / アメリカの強さの三つの源泉、軍と大学とハリウッド 86

ニューヨークでのホテル暮らし

お金の使い方の分だけ自由のあるニューヨーク 88

9・11で浮き彫りになったアメリカの不安

9・11を加害者側から見えてしまう私 92 / 9・11の「壮快」はどこからやってきた？ 93 / 「敗戦」も「終戦」もないからアメリカは不安 97

9・11で変わったアメリカ

人の存在を感じさせなかったかつてのニューヨーク 102 / 9・11でアメリカは新たなステージに移行した 104 / 9・11後、警戒心がそこしこに漂うアメリカ 106

アメリカという不安の国

米国で経験した大統領選挙 108 / アメリカを知りたがるアメリカ人 111 / 他の国を認めたくない不安 113 / アメリカ人とアメリカという国のギャップへの失望 115

初めてのアメリカ人

アメリカ人との出会いは「人間という動物」との出会いだった 118 / アメリカの不

第3章

安は、反省や疑いと共にある 121／零下三十度もはね返すアメリカ人らしさが面白
い 123

パリ パリは出会う

プロローグ 始まりはノートルダム

パリのプラットホーム 126／「あ、ノートルダムですね」 128

パリと全共闘

ふらんす野郎に出会った駒場 134／駒場にはパリらしい開放感(?)があった 137

パリ留学

パリの思い出の最深部に残る「イタリア広場」 140／パリは孤独になる自由を与えてくれる 144／ある老人との意外な出会い 146／何者でもない自分への焦り 150

パリと全共闘とバカ

全共闘の後に訪ねたパリ 153／平井さんとの偶然の再会 155／全共闘はバカだった? 158

第4章

廃墟、歴史の中に、住まうパリ

廃墟が町の真ん中にあるヨーロッパ 161／パリの人間は歴史の中に暮らす 164／パリという巖^{いわお}と、アパルトマンという洞窟 167

現在のパリ

今のパリと、かつてのパリの住人は変わった 169／パリに住むために必要なこと 172／なじんではいたはずのパリは冷たかった 173／現実のパリは仕事やキャリアの街 176／いつもパリに漂うある思い 178

ソウル 韓国は変わる

プロローグ ふと思いついたソウルへの寄り道 182

初めての韓国24時間

「歴史認識」の冷たい鉄板 184／「ああ、そうか、日本人か」 186／いま思えばおそろしく親切だった人々 188／異国で見た日本 190／日本語を話すおばあさん 192／日本について話さない空気 194／バスに乗り合わせた男の俠気^{きやうき} 197／YMCAで見た映画の中の日本 200

再びの韓国

あまりにも「離陸」していた韓国 202／現代都市文化の生活スタイルに変わった韓国人 204／ソウルには多幸感があつた 206／キョンジュの市場の英語教室 210／日本人が引き金となつて噴出するある感情 213

2000年の韓国

日帝40年の熱い記憶？ 217／「日帝40年」が残した日韓の戸惑い 220／韓国人はどこか日本人と似ている 221

忘れられない韓国の女子高生

疑似ヒッピーの感覚を取り戻した3日目の韓国 224／女子高生のやりとりでやつとバランスが取れた韓国の見方 226／行って、見る、ことは大きい 229

第5章

ケンブリッジ

英国はふるまう

プロローグ ちなみに2回目のノーベル賞受賞 234

ケンブリッジのカレッジ生活

跳ね上がって始めた博士論文 239／ケンブリッジを味わった最初の半年 242／Silver

に始まり Silver に終わったカレッジ生活 243

英国人のふるまい

英国社会に連綿と横たわる階級意識 246／探偵ホームズを生んだ四段重ね人間観

248／パブリック、グラマーとコンプリヘンシヴの差 250／言葉を中核にしてふるま

い合うイギリス人 252

ケンブリッジのふるまい

ガウンのケンブリッジ、タウンのケンブリッジ 256／階級、宗教、何々人、学歴、

が多種多様な隣人たち 259／ケンブリッジに住む人々はある生き方をふるまう 265

ロンドンのふるまい

Groucho Club に連らく入会 267／ケンブリッジとは違うふるまいや規則 269／Groucho

Club でゑえ階級を引きずっている 272／性が派手に演じられたカレッジ 276／英国

社会は、性で揺らされ、変化した 279

イギリス人は激しい

実は粗暴なイギリス人 282／二度目のノーベル賞を後押しした「知的な蛮勇」 284

人種としてのふるまい

忘れられないもう一人のアジア人 287／ともにイギリスに不適応だった二人 289

変わる、変わらない

プロローグ 何をやっていたのか分からない20世紀 294

ロシアは生きている

国のかたちは変わっても、インテリの執拗さは変わらない

悩みの伝統を更新し続けるロシアのインテリ 296／悩み続けるインテリに夢を与

えるプーシキン 299

アメリカに迫る不幸

強いアメリカは変わりはじめたが、不安は変わらない

アメリカの不安の最大の理由とは？ 302／一本調子で生きてきたアメリカの終わ

り 304／アメリカは迫りくる大きな不幸をさけられるか？ 308

パリジャンがいなくなったパリ

来る人は変わるが、都市としてのインフラは変わらない

最近、パリで会うフランス人は変わった 312／出合いの町、快楽のインフラとして

のパリは変わらない 315

韓国は苦しい

苦境のかたちは変わらず、対応だけが変わる

消えなくても、時間で薄れていくことはある 317 / 日本対韓国、韓国対北朝鮮の奇

妙な共通点 319 / 半島国家の苦境 321

加速する一群とスロー化する世界

世界は動くことで均衡を保つ

スローになろうと頑張っているがなかなかない世界 323 / 移動することに変化

に対応するイギリス人 325 / 動くことで均衡を保つ夫婦 326 / アングロ・サクソン

型の論理と行動力 327 / 私が旅を続ける理由 329

おわりに 未来を旅するあなたへ 330

旅する知 世紀をまたいで、世界を訪ねる

はじめに

旅すること

私にとっての旅

いつも一人旅だった。連れがいても、気がつくとい人の気分になっている。職業として人類学者なので、調査地に単独で入ることがならいとなったこともある。しかし、人類学者になる前に、20を少し過ぎたばかりの年で横浜を一人で船出したあの日が、私の旅のかたちを決めた。

旅は私にとって、時間の中を流れてゆくことだ。最初の数日間、慣れた空間と別れ、半透明の霧をまとい独りになる。その霧が次第に透き通った膜になり、周りに世界が見えてくるのだが、向こうからはこちらが見えないかのような錯覚の時間が訪れる。それがどのくらい続くかは定まっていけないのだが、ふとしたきっかけでその世界から話しかけら

れたりすると、私を覆っている、すでに堅くなっていた膜が瞬時に碎けて、私はその世界に踏み出す。それでも、私一人の時間と訪れている土地の時間は、同じ速度ではあるが交わらず平行していて、帰る日までそれは続く。私にとって、旅に出るとは、再びその、旅の時間の中に入っていくことだ。

だから、たいがい旅は一人です。連れがいれば荷物を見てくれるのに、とか、結局ホテルは二人分払われる、とか、何よりも、目の前の大きな滝について語り合う相手がほしい、といった、一人で旅する不便は、いくらも出てくるのだが、それは旅をするからには、仕方のないことだろうと思う。代わりに、横に誰もいない時間が、明るいのに寂しくて、慣れるとなかなか気分がよい。それを求めて旅に出る気もする。

「何でも見てやろう」で世界をかけまわった旅行者たち

振り返ると、幕末の日本に旅行者がやってきた、あれがいまの日本人にとっての世界旅行の、先駆けだった。閉じられた日本列島に、地球上ほとんど最後の、未踏の王国を訪ねてきたのだ。もちろん、帝国主義的な国家戦略に沿って日本を調べてやろう、といった魂胆もあったろうし、経済的な利得を求めてでもあったろうが、なによりも、閉じられた門

が開いたのだから、中を覗いてみたかったのだ。言葉も通じない、しきたりも分からない未知の島に、足を踏み入れる不安はあったろう。それをも越えて、それまでにヨーロッパに送られてきた稀少な園芸植物や工芸品の洗練と、17世紀から19世紀までの数少ない訪問者が書いた「大君の国」の旅行記から垣間見える、その国の人々のきらめきとざわめきが、19世紀の欧米の旅行者たちの興味をそそった。

幕末の旅行記を読むと、いまの私たちにも、かつての「日本」という精巧に作られた人形の家（ドールハウス）のような、どの時空からかけ離れた世界の、内側を見せてくれる。旅行者たちの興奮は、いかばかりか。おしなべて近代の「旅行」は、この時期、隆盛を誇った西洋人による、異世界の探索であった。18世紀の後半にはそうした探検家の代表者である英国人のクック船長が世界を回り、東北の沖合から日本を望見したりしている。19世紀になると、これもたまたま、苗字が同じトーマス・クック社が設立され、1872年に売り出された最初の世界ツアーには、早くも「Japan」が組み入れられた。その頃までは、私たちは、西洋人の好奇心によって、見られる側だったのだ。

しかしながら見られる側の日本人にとっても、外国からの旅人は、珍奇な見世物であったに違いない。江戸時代、長崎の出島を通じてやってくるオランダ人やその交易の品々、朝鮮からの通信使の行列、江戸の後期にはまた蝦夷地の風俗や品々が、人々の好奇の目を

とらえた。その好奇心は、やがて、開国ののち、今度は日本人を旅に誘うことになる。咸^{かん}臨丸^{りんまる}の航海、明治政府要人の米欧回覧の旅、と、この島から人々は、今度は自分たちが世界を見るために出かけることとなった。でも、見られる側から見る側が変わった日本であったが、戦前までは、選ばれた人、何かの意味で特別の人だけが外国に行くことができた。それが、第二次大戦後、経済が回復して高度成長の軌道に乗ると、外貨の規制が緩和され、海外旅行がふつうの人にも可能となったのだ。

1970年の初秋に、シベリア經由欧州行き、横浜——ナホトカ航路のバイカル号の上にいた私は、そうした、見られる側から見る側に変わった日本人の、新たな波の先端に立っていた。人生の最後の楽しみとしての海外旅行ではなく、小田実の『何でも見てやろう』が先鞭をつけた、若者が人生の初めに行う、自前の「修学旅行」の開始期にいたのだ。

フーテンの寅さんが旅に出る理由

若い頃、庄内地方の村で調査をしていたことがある。泊まらせていただいていた家の囲炉裏におさまっていると、やってきたよその家のおばあさんがふだん見かけない私を見て、その一家の主^{あるじ}にとも、私にともつかない言い方で、「たびの人かあ」と問うた。私はその